

教職協働による AI を用いた語学学習の効率化に関する研究

第一報

―研究枠組みと試験的な試み―

三國 信夫* 田淵 敬光* 高山 幸巳** ティティ レイ*** タン セオ クン****
平野 宇洋***** 湯浅 彩香***** 齋藤 大志***** 栗田 るみ子*****

* 城西短期大学准教授 ** 城西大学別科准教授 *** 城西大学理学部教授 **** 城西大学経済学部准教授

***** 城西大学教務部教務課長 ***** 城西大学教務部教務課長補佐 ***** 城西大学教務部教務課員 ***** 城西大学副学長

はじめに（研究の背景と目的）

生成 AI（Generative AI）は、大規模言語モデル等の技術により、文章生成・要約・翻訳・対話などを自然言語で実行できる点に特徴がある。とりわけ 2022 年末以降、対話型生成 AI が一般利用者にも急速に普及し、学生・教職員が日常的に利用できる環境が整った。高等教育機関では、学習支援、教材作成、学修成果物の作成支援など、教育活動の多様な場面で生成 AI の利用可能性が認識されつつある。

一方で、教育現場では、生成 AI の導入が学修プロセスや評価の在り方に与える影響が大きい。例えば、課題の作成支援が容易になることで、学習者の思考過程が可視化されにくくなる可能性や、学術的誠実性（Academic Integrity）をいかに担保するかという課題が顕在化している。また、生成 AI の出力には誤情報や偏りが含まれ得るため、利用者が批判的に検証する力（情報リテラシー）を前提にした指導設計が求められる。

語学学習の領域では、学習者が「理解」から「運用」へ移行する過程で、十分なアウトプット機会と適切なフィードバックが必要である。しかし、授業時間や教員の指導リソースには制約があり、個別最適化された練習機会を継続的に確保することは容易ではない。生成 AI は、会話練習の相手、作文の推敲支援、語彙・文法の確認、学習者の理解度に応じた練習問題の生成等を通じて、学習者の自律的学習を後押しする可能性を持つ。他方で、過度な依存や誤用（機械的な翻訳・丸写し等）を防ぐため、学習目的に即した利用ルールと、学習者が「考えながら使う」ための設計が不可欠である。

さらに、大学・短期大学の事務現場に目を向けると、国際化の進展に伴い、多言語での案内、学修手続きの周知、問い合わせ対応などの業務が増大している。業務の正確性・迅速性を担保しながら、限られた人員で対応することは大きな負担となり得る。生成 AI は、定型文書のたたき台作成、要点整理、翻訳の初稿生成など、一定の範囲で業務効率化に寄与する可能性があるが、個人情報・機密情報の取り扱い、誤訳や不適切表現によるリスク管理など、導入にあたってのガバナンスが欠かせない。

以上のように、生成 AI 活用は教育現場と事務現場の双方に機会と課題をもたらす。したがって、生成 AI の利用を個々の教員や職員の裁量に委ねるのではなく、教育的妥当性と運用上の安全性を両立させる枠組みが必要である。とりわけ、教育の設計・実施を担う教員と、学修支援や学内手続きを担う事務職員が、目的・ルール・運用手順を共有しながら改善を進める「教職協働」の視点は、生成 AI 活用を持続可能な取り組みとして定着させる上で重要な基盤となる。

本研究は、生成 AI を語学学習支援および学内業務支援に活用する際の教育的効果と運用上の課題を、教員と事務職員の協働の枠組みの中で整理し、実装可能なモデルとして提示することを目的とする。対象は、英語科目（日本人初年次）および日本語科目（留学生）における学習支援、ならびに教務関連業務を中心とした事務プロセスの一部とする。

具体的には、次の三点を中心的な目的として設定する。

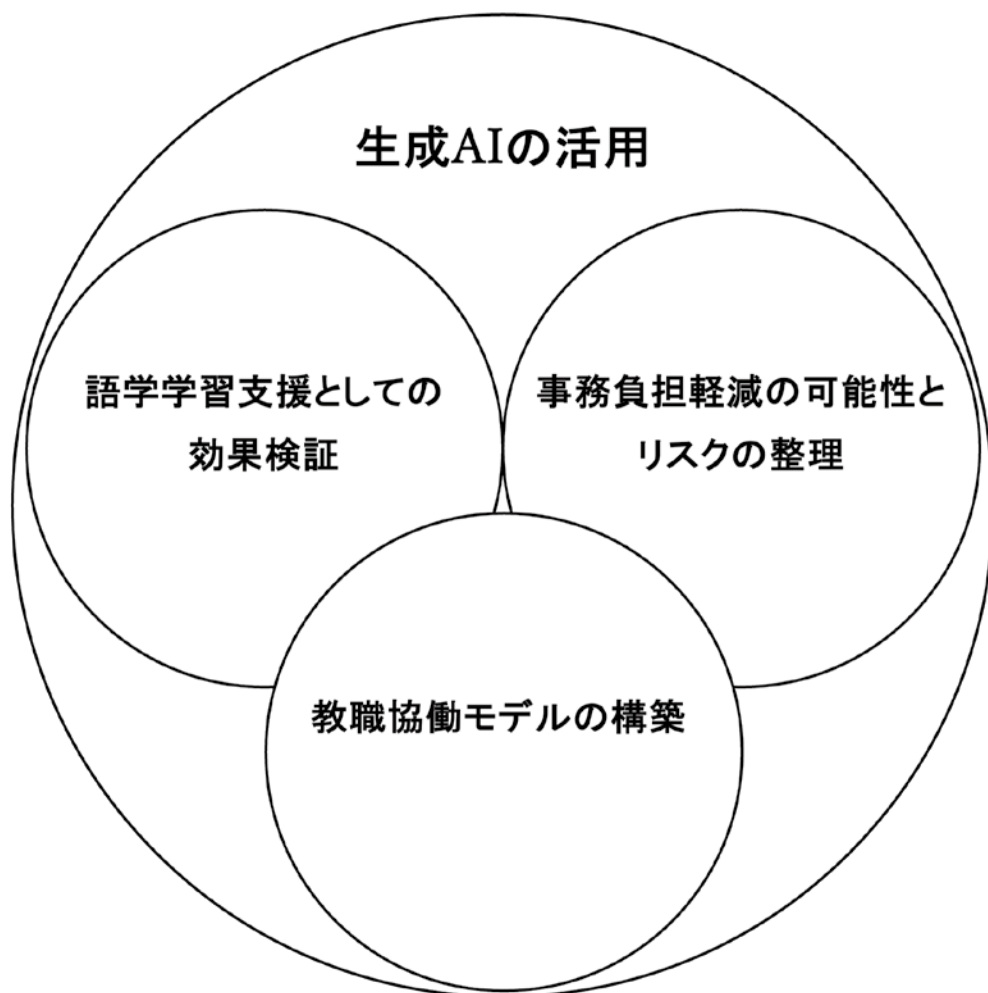
① 語学学習支援としての効果検証：生成 AI を用いた対話練習、ライティング支援、語彙・文法確認等の試行を通じて、学習者の学修行動（学習時間、反復回数、自己修正の頻度等）および学修成果（文章の明瞭性、誤りの減少、自己効力感等）に与える影響を探索的に検討する。

② 事務負担軽減の可能性とリスクの整理：多言語案内文の作成、問い合わせ対応文の下書き、要点抽出など、教務関連の定型業務における生成 AI 活用を試行し、作業時間・心理的負担・品質（表現の適切性、誤訳・誤情報の発生等）の観点から導入効果と課題を整理する。

③ 教職協働モデルの構築：上記①②の試行を踏まえ、ツール選定、利用ルール、プロンプト共有、成果物のチェック体制、個人情報の取り扱いなどの論点を、教員・事務職員が共同で検討するプロセスとして体系化し、学内で再現可能な運用モデル（役割分担と改善サイクル）として提示する。

以上により、本研究は「学習支援の質の向上」と「事務負担の軽減」を同時に目指す点に特徴がある。さらに、教育実践と組織運営を横断する教職協働の観点から、生成 AI 活用の具体的手順と検討項目を明確化することで、高等教育機関における持続可能な生成 AI 活用の基盤形成に資する知見を提供する。なお、本稿では第 1 章で研究の枠組みと理論的整理を示し、第 2 章で予備的検討および試行結果を報告した上で、第 3 章において 2026 年度に向けた AI 活用の検討、第 4 章において今後の課題と展望を論じる。

図1.本研究の目的と検討対象の概念図



1. 本研究の枠組みと理論的整理

(1) 先行研究の整理

2023 年以降、ChatGPT をはじめとする大規模言語モデルの普及に伴い、語学教育分野では生成 AI の活用可能性を探る実践研究が急速に蓄積されている。こうした先行研究をみると、英語教育分野では、吉田 (2024) や柳瀬 (2025) をはじめ、生成 AI を活用したライティング支援や対話型練習の実践報告が多数見られる。これら多くの研究は、AI フィードバックを踏まえた self-revision (自身による見直し) のプロセスが学習者のメタ認知や自律学習態度を促進する可能性を指摘している。特に、学習観や学習方略との関連を分析した研究では、AI を単なる代替装置ではなく「思考を可視化する足場」として位置付ける議論が展開されている。一方、日本語教育においても、寺嶋・稲田 (2024) や佐藤 (2024) など、留学生の日本語ライティ

ングにおける生成 AI 活用が報告されている。ブレインストーミング、語彙の確認やレポート FB における AI 活用により、日本語学習者の表現力向上と同時に評価観点の明確化に寄与することが示唆される。また、長谷川 (2024) のように、日本語学習者の日本語会話の評価に関する研究も現れており、AI が評価の補助的役割を果たす可能性が議論されている。

ただし、現段階の研究の多くは授業実践報告や探索的研究にとどまり、「誰が」「何を」「どの範囲まで」AI を活用するのかという主体別整理や、教員・職員を含む組織的導入の研究は限定的である。例えば、本研究は語学学習・教育における AI の活用主体を①学習者主体、②教員主体、③事務職員主体の 3 つに整理して捉えようとしている。さらに、これまでの研究の多くが単一科目内の実践にとどまり、初年次英語と留学生向け日本語科目を横断して比較検討する枠組みは未整備である。本研究は、英語科目と日本語科目を対比させることで、生成 AI 活用の共通構造と相違点を明らかにする点に独自性を有する。さらに、本研究は、そうした AI 活用を「教職協働」という枠組みで再整理し、大学教育全体の効率化モデルを提示する点でも特徴を有しているといえよう。

(2) 本研究の枠組み

これまでの研究を踏まえて、本研究では、「AI 活用」を「生成 AI・適応型学習 AI・音声認識 AI・自動評価 AI 等を用いて①学習支援、②授業設計支援、③学習管理・履修管理支援を効率化・高度化する行為」と定義する。そのうえで、さらに利用主体別に AI 活用における機能領域について検討してみよう。

まず、学習者主体の AI 活用においては、学習者が自律的学習を目的として、理解補助・言語生成補助・フィードバック取得・対話練習・誤用訂正 AI を主たる機能領域として活用していくことになる。さらに、英語科目においては、ライティングの添削支援・英作文リライト比較・シャドーイング補助・会話シミュレーションなども機能領域として挙げられよう。一方、日本語科目においては、語彙説明・作文練習補助・敬語運用の確認・発音フィードバックなどの機能領域での活用が考えられる。

次に、教員主体では、教員が授業設計・教材作成・評価・個別指導補助を目的として、教材生成・レベル別問題生成・自動採点補助・学習履歴の分析・フィードバック生成等の機能領域を中心に AI を活用していくことになるだろう。また、英語科目においては、さらに CEFR に準拠した問題の作成・評価ルーブリックの作成・形成的評価にあたってのコメント案の生成などの利用も考えられる。日本語科目では、レベル別の会話教材生成・読解問題の自動生成・誤用傾向の分析などで利用可能である。

さらに、事務職員主体の活用は、履修・在籍管理や包括的な学習支援体制の構築を目的として、問い合わせの自動応答・履修状況および成績動向の分析・早期離脱予測・留学生の学生生活支

援チャットボットといった機能領域での活用が見込まれる。さらに、英語科目においては、初年次英語プレースメントテストの分析やリメディアル対象の抽出などでの活用も考えられる。日本語科目においても、出席・成績の相関分析といった活用も挙げられよう。まとめると表1のようになる。

表 1. 主体別の活用機能領域

活用主体	活用目的	具体例 1 (英語)	具体例 2 (日本語)
学習者	自律学習 会話練習	英作文添削 ロールプレイ	作文誤用修正 敬語練習
教員	教材作成 評価補助	CEFR 等課題生成 FB 草案	文型別問題生成 誤用傾向分析
事務職員	履修分析 早期警告	到達度抽出 低成績抽出	在籍管理 離脱予測

従来の AI 活用研究は、主として①学習者による自律学習支援、あるいは②教員による教材作成・評価支援に焦点を当ててきた。しかし、高等教育機関における語学教育は教員と学習者のみで成立するものではなく、教務を中心とした学習支援部門の事務組織を含めた制度的枠組みの中で運営されており、AI 活用もまた、個別的学习補助を越えた、制度運営や学修管理と接続する形で再構築される必要があろう。本研究は、こうした主体別の語学教育における AI 活用を「教職協働」の観点から再編成し、学習支援機能・教育設計支援機能・運営管理支援機能という三層構造として整理しようとするものである。

図2.教職協働型AI活用語学教育・学習の三層モデル

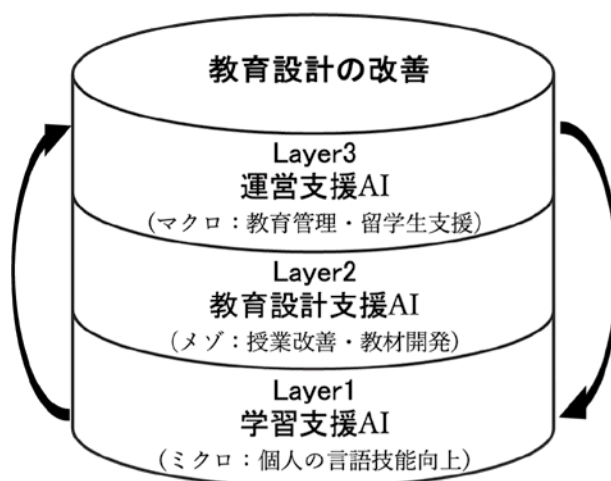


図2のように第一層は、学習者個人の言語技能向上を目的とするミクロレベルの AI 活用である。ここでは、生成 AI や音声認識 AI、自動添削 AI 等により対話練習・作文補助・発音矯正・語彙

説明などといった直接的な学習支援を担うものである。この層では、自己効力感や自律学習時間、フィードバックの即時性といった要因が検討すべき主な変数となる。

第二層は、教員が教育活動を高度化・効率化するためのメゾレベルの AI 活用である。具体的には、教材生成やレベル別課題の自動生成、形成的評価コメント (FB) の草案の作成、誤用傾向のデータ分析などが含まれよう。この層では、教育設計の質的向上や教員の負担軽減の両立が主な焦点となる。特に、大人数の初年次語学科目や留学生日本語教育では、評価負担の軽減や個別的指導の両立が求められ、AI の補助的活用は制度的な意義を持つといえる。また、この層は第一層と連動し、学習者データが教育改善に循環する構造を形成していくこととなる。

第三層は、本研究の特徴的要素であり、教務をはじめとした事務主体により包括的に AI が活用されるマクロレベルの構造である。具体的には、履修状況の分析や成績動向 (低成績抽出) による早期警告、在籍管理支援、留学生向け多言語チャットボット、プレイスメントテストの分析などが該当する。特に初年次英語科目や留学生の日本語科目は、学修状況と在籍管理・学生生活支援が密接に関係しており、教育支援と制度運営を分離して論ずるべきではなかろう。そのため、この層は AI を介して学修データを可視化し、教育的な介入と事務的支援を接続する役割を担う。

以上を踏まえて、次章では語学教育・学習をめぐる AI 活用に関する城西大学、城西短期大学のこれまでの取組みと今後の展望について検討することとする。

2. 2025 年度の AI 活用実践事例

本章では、2025 年度に試験的に実施された AI 活用について記録し、分析を試みたい。

(1) 城西短期大学における取組

(i) 「接客英語」科目概要と到達目標

第一著者が 2025 年度に担当した「接客英語 I / II」は、坂戸キャンパスおよび紀尾井町キャンパスにおいて、春学期および秋学期に開講された。受講者数は、坂戸キャンパス 4 名、紀尾井町キャンパス 6 名であった。

本科目は、接客場面で必要となる基本的な英語表現の習得を目的とし、ロールプレイ等の実践的活動を通じて、外国人客への応対に必要なコミュニケーション能力の向上を目指した。

(ii) 授業運営上の課題

近年の訪日外国人旅行者の増加に伴い、学生のアルバイト先でも外国人客への応対機会が増えている。このため、学生側の学習動機は高まりつつあり、授業内活動にも積極的な姿勢が見られた。

一方で、短期大学 2 年次は就職活動と重なる時期であり、欠席や遅刻等により出席者数が変動しやすい。特にロールプレイでは参加人数に応じた配役が必要であるが、事前に固定した脚本を準備しても、当日の出席状況によっては役割が不足あるいは過剰となり、活動が成立しに

くい場面が生じていた。

(iii) 生成 AI 活用の設計

上記の課題に対し、本年度は探索的試行として、生成 AI（ChatGPT）を用いて当日の出席者数および学生の就労場面を反映した会話スクリプトを授業内で作成し、即時にロールプレイへ展開する方法を試みた。

具体的には、(1) 当日の状況（人数、場面、起こり得るトラブル）を簡潔に整理し、(2) 教員がプロンプトを入力して会話スクリプトを生成し、(3) 生成結果を教材として配布した上で、(4) 学生が役割分担し、練習・実演・振り返りを行う流れである。なお、本稿では個人が特定されないよう、プロンプトおよびスクリプト例は匿名化・一般化して記載する。

(iv) 実践例：第9回「トラブルシミュレーション」

紀尾井町キャンパスの第9回授業では、出席者は5名（欠席者1名）であった。授業テーマが「トラブルシミュレーション」であったことから、飲食店（カフェ）における軽微なトラブルを想定し、当日の参加者数に合わせて、生成 AI（ChatGPT）により会話スクリプトを生成した。

表2. 「接客英語Ⅱ」（第一著者担当）第9回授業シラバス（抜粋）

テーマ	トラブルシミュレーション
到達目標	様々な状況に対応する力を身に付ける。
準備学習	過去のトラブル事例を英語で考える。
特記事項	他者とのコミュニケーションを重視したアクティブな授業を実施する。

出席者のうち1名がカフェでアルバイトをしており、最近職場で実際に起こった出来事を題材として共有した。その内容を参考にしつつ、以下のプロンプトを入力して会話スクリプトを生成した。

表3. 生成 AI への入力プロンプト（例）

- ・5人で英会話の練習をします。対話文を作ってください。
- ・登場人物：短大生 A、短大生 B、短大生 C、店員 A、店長
- ・5人の発話量は、できるだけ均等になるようにしてください。
- ・場面：カフェレストラン
- ・条件：ちょっとしたトラブルが発生し、最終的にハッピーエンドになる。

生成されたスクリプトは、教員が教材として整形し、Microsoft Teams で即時共有するために PDF 化した。学生は役割を分担し、各自の発話を練習・暗唱した後、全員が「カフェにいる」設定で対話を実演した。実演後には、頻出表現や誤用の修正点を教員が解説し、全体で共有した。

図3 ロールプレイ実演の様子



表4 生成された英会話スクリプト（抜粋）

Manager: Good afternoon. I'm the manager. I heard there was a problem with the dessert.
 Student A: Yes. I told the waiter I'm allergic to nuts, but the cake had walnuts on it.
 Manager: I'm really sorry for this mistake. Are you feeling okay now?
 Student A: Yes, I'm okay. I noticed the nuts before eating, so it's fine.
 Manager: I'm relieved to hear that. We will make a new dessert with no nuts at all.
 Student B: Thank you for coming to talk to us.
 Student C: Yes, thank you for your kindness.
 Manager: As an apology, your new dessert will be free, and we will give a small discount on your bill.
 Student A: That's very kind of you. Thank you so much.
 Waiter A: Here is your new dessert: a special fruit plate with no nuts. I'm very sorry again.

（v）学生の反応と教員側の所感（観察に基づく記述）

授業中の観察から、生成 AI を活用した教材生成には、少なくとも次の点で利点が見られた。第一に、学生の就労場面に近い状況設定を反映できるため、活動への関与が高まりやすい。第二に、当日の参加人数に合わせて配役数を調整したスクリプトを即時に準備でき、欠席等であってもロールプレイを成立させやすい。

教員側の観点では、教材作成の負担軽減が期待できる。例えば、特定の表現（謝罪、代替案の提示、割引の提案等）を会話の流れに自然に組み込み、学習対象を明確化した教材を短時間で用意できる点は、運営上の利便性が高い。

（vi）今年度試行の限界と今後の課題

もっとも、本年度の取り組みは教員による探索的試行であり、学習成果の向上を統計的に検証したものではない。また、生成 AI が作成した内容の妥当性（語用論的適切性、難易度、誤

情報等)については、教員が必ず確認・修正する必要がある。

今後は、授業観察に加えて、事前事後テスト、ループリックによるパフォーマンス評価、学習者アンケート等を組み合わせ、学習効果と授業運営上の効率化(準備時間、配布・共有の工数等)を多面的に評価する枠組みを整備する必要がある。

(2) 教学系事務領域における AI 活用の実践分析と今後の展望

(i) 教学系事務の領域

本学事務局はおおむね 25 の課・事務室で構成され、約 150 名の事務職員が業務にあたっている。教学系事務と区分されるのは、主に教務部であり、教務課(教務係、リベラルアーツ係、教職課程係)、経済学部事務室、総合政策学部事務室(2026 年度名称変更)、経営学部事務室、理学部事務室(数理・データサイエンス係)、薬学部事務室、短期大学事務室(2026 年度廃止)が設置されている。本節では、第六、第七、第八著者が所属する、教務部教務課の業務において、AI 活用の実践状況とその効果を整理し、今後の展望と課題について考察する。

(ii) 教務部教務課の役割

教務部教務課(以下、「本課」という。)は、教育活動の基盤を支える諸業務を包括的に調整するとともに、教学に関わる常置委員会での審議、承認された様々な事項を、組織的かつ有機的に機能させる役割を担っている。

具体的には、教育の質保証および質向上に関わる「教学」領域と、授業運営や履修管理、学事暦などの実務を担う「教務」領域の双方を所掌し、教育活動全般を制度面・運営面から支えている。このように多岐にわたる業務特性を踏まえ、AI 活用の現状と可能性をまとめる。

(iii) AI 活用の実践例

●実践 I 「履修支援の強化、シラバスへのリンク生成」

本学では、年間約 3,500 コマの授業が開講されており、学生は、自身のカリキュラムの体系を、カリキュラム・マップおよびツリーを通じて、履修科目の順次性や、ディプロマ・ポリシーとの関連性を把握しておくことが求められる。履修申請時には、シラバスから講義スケジュール、授業方法等を確認することが重要であるが、課題として、同一科目名であっても所属学部によってシラバスが異なることや、確認までの手順が多く、結果的に利用されないことがある。この課題解決に向け、大学ホームページに掲載する各学部の授業時間割表の科目名に、該当するシラバスをリンクすることで、容易に確認できる仕組みを構築した。これらの作業は、AI を活用することで、短時間で実装することができ、学生の履修支援の向上に寄与した。

●実践Ⅱ「関連科目の仕分け効率化とシラバス精査の可能性」

本学の授業科目は、「全学共通基盤科目」「基本科目」「専門科目」「関連科目」「教職に関する科目」からなる。本学の課題の一つに、科目数の肥大が挙げられ、多角的に解消に向けて取り組んでおり、その一環として関連科目の分類付けがある。関連科目は約 465 科目（2026 年 2 月時点）あり、これらを、分類 1「専門科目に関連する科目」と、分類 2「リベラルアーツ系の科目」に仕分け、その上で、AI を活用し、分類 2 をさらに「人文科学」「社会科学」「情報科学」「スポーツ健康科学」「語学・コミュニケーション学」の 6 分野に仕分けを行った。具体的には、本学のリベラルアーツ教育科目の 6 分野と、関連科目のシラバスを読み込ませ、授業の目的から 6 分野への仕分けを行った。その結果は、人的作業の結果と突合し、差異がないことが確認できた。作業の効率化だけでなく、シラバスの内容を精査する精度が確認できたことで、今後の業務への適用可能性に期待が持てる。

●実践Ⅲ「授業時間割表の自動生成」

授業時間割編成は、教学事務システムより予め登録をした、授業科目ごとの曜日・時限・教室・対象学生を、一括ダウンロードし、Excel データを切り貼りして、学科の授業時間割表を作成している。今回、マクロを組んで自動生成に向けて試行的に AI を用いて実施した。実装には至らなかったが、マクロへのテキスト指示の課題が明確になったことで、引き続き AI とのラリーによって改善が期待できる。

●実践Ⅳ「学生のローマ字氏名のルールベースの一括変換」

2024 年度より学位記を日文に加えて英文を併記する仕様に変更した。

これに伴い、約 7,000 名の学生ローマ字氏名の点検が必要となった。ここでの課題は、ローマ字表記をヘボン式に統一するための登録に時間的制約があったことである。今回、AI にヘボン式を読み込ませ、全学生の氏名を一括でヘボン式への変換を行った。結果、長音のつづり方に引き続き確認が必要であるが、おおむね完了することができた。今後は、現在、手作業で行っている学位記の文面確認を AI のみでの完了を進めたい。

(iv) AI 活用の障壁と展望

本学では、Microsoft Copilot の有償ライセンスが提供されている。現状では限定的なライセンス数となっており、教職員の約 8% の配備状況である。セキュアな環境による AI 利用を目的としている一方、有償ライセンスを持たない教職員は、無償版の AI を多用している。

本研究では、事務職員に対し、AI の意識調査を行うとともに、2026 年度は、教務課職員を対象に有償での AI 利用を促進し、知の蓄積と共有を図る。前節での実践例を応用し、シラバ

スチェックの自動化、授業時間割表の自動生成、各種調査の根拠確認、履修者のクラス分けの業務を対象に、多くの人的・時間的資源を投入している現状の軽減、削減を目指したい。

具体的には、オールインワン型 AI ツール（Genspark）を用い、履修者数等のデータの整理・分析、クラス分け案の作成に加え、シラバス記載内容の確認作業に活用することとする。AI は、記載項目の過不足や表現のばらつきの確認等を支援する補助的手段として位置づけ、最終的な判断は担当者が行うことを前提とする。なお、AI の利用にあたっては、個人情報、成績情報、学内の機密情報等について、個人を特定できる情報をそのまま入力しないことを原則とする。検証には、氏名や学籍番号を削除またはマスキングしたデータを用い、情報管理上のリスクに十分配慮する。

AI 活用の障壁の一つに、日常業務に即した具体的な活用方法が思い浮かばないことと、漠然としたセキュリティ面での不安が挙げられる。本研究成果は、AI 活用の実態と可能性を整理し、今後の教職協働による AI 活用方策を検討するための基礎資料とする。

表 5. AI 利用状況に関する調査アンケート

－ AI 利用状況調査 －	
1. 基本属性（所属、職位） 2.AI 利用状況 2.2. 業務における AI の利用頻度 ①日常的に利用している ②時々利用している ③業務外で利用している ④利用していない 2.3.AI を利用している主な場面 ①文書や資料の作成・表現の整理 ②データの整理・要約 ③情報収集 ④業務手順の確認・整理 ⑤利用していない ⑥その他（自由記述） 2.4. 業務で AI を利用しにくい理由 ①具体的な使い方が分からない ②業務に適用してよいか判断が難しい	③誤った情報が出る不安がある ④個人情報・機密情報の取り扱いが不安 ⑤利用する時間がない ⑥特に不安はない ⑦その他（自由記述） 3.AI 活用への期待 ①データ整理・確認作業の効率化 ②業務時間の短縮 ③業務の標準化・属人化の解消 ④ミスの防止・確認精度の向上 ⑤新しい業務方法の発見 ⑥特に期待していない ⑦その他（自由記述） 4. 業務における AI 活用について、期待や不安があれば自由に記載してください。

3. 2026 年度に向けた AI 活用の検討

本章では、ここまで整理してきた語学学習をめぐる AI 活用に関する定義や実践事例を踏まえて、2026 年度に向けた AI 活用について検討したい。

(1) 日本語科目（作文・聴解）の AI 活用の余地

(i) 作文における AI 活用

第二著者が担当する別科日本語専修課程「日本語基礎Ⅱ A・B」は基礎的な文章作成能力の育成を目的とする初級後半～中級前半レベルの作文科目である。本科目では、同時期に学習する語彙・文法を活用し、与えられたテーマに対して適切な文章を構築するためのプロセスを理解し、段階的に運用できるようにすることを目標としている。授業はインクラス・ライティングをベースとして以下の手順に基づいて進行している。

1. テーマの確認
2. プレーンストーミング
3. 使用語彙・文法項目の確認（他の科目の進度にあわせたもの）
4. 学生による初稿執筆
5. 教員による添削
6. 学生による修正
7. 修正内容に対する教員の再確認
8. 学生による WebClass（レポート形式）への入力
9. 教員による入力内容の確認・追加指摘（プロジェクター使用）
10. 学生による WebClass での最終稿提出

2025 年度は春・秋学期ともに履修者が 6 名と少人数であったことに加え、学生間で執筆速度に大きな差が見られた。そのため、教員が一人の学生の作文を添削している間に、他の学生が長時間「添削待ち」の状態になることはほとんどなく、結果として授業全体の進行は比較的円滑に保たれていた。

しかし、このように授業進行自体は滞留なく進められたものの、授業時間の多くが添削と修正指導に割かれる構造は変わらず、文章構成や段落展開、論理的記述といった上位の文章能力に関する指導を体系的に行う余裕は十分に確保できていない。学生は学習済みの語彙・文法を正確に使用する力は身につけつつも、文章全体の構成力やアカデミック・ライティングの基礎的能力の伸長は限定的であるという課題が残っている。作文指導においては「言語形式の正確さ (accuracy)」と「文章構成・内容の適切さ (organization / content)」の双方を扱う必要がある。しかし、現状の授業運営では添削作業に多くの時間が割かれ、構成指導やモデル文分析、段落構造の明示化といった「文章力の育成」に関わる活動が十分に実施できていない。

このような状況を踏まえると、上記 1～10 の各段階に AI ツールを適切に導入することで、授業運営の効率化が期待できる。具体的には、

- プレーンストーミング支援
- 語彙・文法の確認作業の自動化
- 添削作業の一部自動化
- 修正履歴の可視化

といった場面で AI を活用することにより、教員が文章構成指導やアカデミック・ライティングの基盤形成に時間を割くことが可能となる。AI 活用は、学生の自律的学習を促進しつつ、教員の負担軽減と指導内容の質的向上の双方に寄与する可能性を持つ。特に、学生の執筆速度の差が大きいという現状は、AI を活用した個別支援と相性が良いといえよう。例えば、構想段階でのアイデア整理支援、語彙・文法の即時確認、初稿の段落構成チェックなど、学生が自律的に進められる工程を増やすことで、教員の添削待ちによる停滞をさらに減らし、学生一人ひとりのペースに応じた学習環境を整えることが可能となる。

2026 年度は、これらの AI 活用を授業デザインに組み込み、文章構成力の育成や段落構造の理解、論理的記述の基礎、談話標識の適切な運用、ジャンルに応じたスタイルの習得といった、これまで十分に扱えなかった領域に指導の重点を移すことを目指したい。また、こうした作文の授業における AI の活用において、学生が AI を単なる「代筆」として利用することを防ぐ手立ても併せて検討していくこととする。

(ii) 聴解における AI 活用

次に、聴解の授業における AI 活用の余地について検討してみよう。本年度、第二著者が担当した別科日本語専修課程「日本語発展 V C・D」は、日本の一般社会や高等教育機関でスムーズにやり取りができる発展的な聴解能力の育成を目的とした、中級以上の学生を対象とする聴解科目である。今年度の履修者は春学期 4 名、秋学期 6 名と少人数であったが、初中級レベルを終えた学生から、すでに N2 を取得している学生まで、習熟度の幅が大きいクラス構成であった。そのため、WebClass を介して各自のスマートフォンでレベル別の音声教材を聞き取らせる方式を採用し、難易度の個別化を図った。授業の進行としては、まず、20～30 分程度、ディクテーション活動を行った。学生は自分のレベルに応じた音声を WebClass で聴取し、指定の用紙に全文を書き取る。その後、同様に WebClass 上でレベル別の聴解問題を提示し、プリントに解答させた。解説は随時、教員が個別に行い、その間、他の学生は黙々と問題に取り組むという形式であった。しかし、この「黙々と取り組む」状態は、裏を返せば教員が一人の学生に対応している間、他の学生が「待ち時間」を過ごしていることを意味している。時間の学習密度をさらに高めるためには、この待ち時間をいかに学習的に価値ある時間へと転化させられ

るかが課題であろう。また、今年度は少人数であったため難易度の個別化が可能であったが、履修者が10～20名規模となった場合、現行の運用では対応が困難になることが予想される。そこで、聴解授業においては、以下のようなAI活用によって難易度の個別化を維持・発展させることが可能であると考ええる。

- リアルタイム・フィードバックの自動化
- レベル別教材の自動生成
- 学修データに基づく進捗管理と分析の高度化

リアルタイム・フィードバックについては、現在は教員が行っている個別解説の一部を、AIチャットボット等が担うことで、ディクテーションの正誤判定や基本的な文法・語彙の説明を即時提供できる。これにより、学生は教員の順番を待つ必要がなくなり、学習の停滞を防ぐことができる。

次に、レベル別教材の自動生成については、従来はあらかじめ用意した音声教材を使用していたが、生成AIを活用することで、特定の学生が苦手とする語彙や文法項目に焦点を当てた個別最適化されたリスニング教材やスクリプトをその場で生成することが可能となる。これにより、難易度の個別化をさらに深化させ、学習者のニーズに即した柔軟な教材提供が実現できる。

さらに、進捗管理と分析の高度化については、WebClass上の解答データをAIが分析し、各学生の「聞き取りにくい音声特徴」や「誤答の傾向」を可視化することで、教員はよりの絞った効果的な個別指導を行うことができる。この分析結果は、先述のレベル別教材の自動生成におけるデータ基盤としても活用できよう。作文科目と同様に次年度の聴解科目においても、こうしたAIの活用によって学生の学習密度をさらに高めていきたい。

(2) 日本語による調査発表活動および漢字科目におけるAI活用の余地

(i) 調査発表活動におけるAI活用

第三著者が担当する別科日本語専修課程「日本語基礎ⅡC・D」および「日本語発展ⅡC・D」は日本語初級から初中級レベルの学生達が自分の深く関心のある事柄について、主体的に調査し、自分らしく生きた日本語で発表できるようになることを目標とする調査発表活動科目である。

1学期週1コマ(105分)全13回の授業は、下記のようにスケジュールされており、1回～12回までは、大学のコンピュータールームで1人1台ずつのデスクトップ型コンピュータを使用して発表用の資料作成と発表練習を行い、最終回は教室で日本語での質疑応答も含めた発表会を行う。

【全13回の授業スケジュール】

- 1回目：導入（調査活動と発表に関する説明）＊先輩達の発表動画視聴
- 2回目：発表準備①（調査計画書作成・発表資料(PPT)の構成理解とパソコン入力練習）

- 3 回目：発表準備②（調査と発表資料の作成開始）
- 4 回目：発表準備③（調査と発表資料の作成）
- 5 回目：発表準備④（調査と発表資料の作成）
- 6 回目：発表準備⑤（調査と発表資料の作成）
- 7 回目：発表準備⑥（調査と発表資料の作成）
- 8 回目：発表準備⑦（発表資料（発表原稿）の作成）
- 9 回目：発表準備⑧（発表資料（発表原稿）の修正）
- 10 回目：発表準備⑨（進度調整と発表練習）
- 11 回目：発表準備⑩（発表練習）
- 12 回目：発表準備⑪（リハーサル）
- 13 回目：発表会

もちろん、初級レベルの学習者にとって日本語による調査発表活動は簡単なことではない。特に日本語だけで書かれた情報（資料）を読解するのは通常無理なレベルである。従って、テーマは「私の国の〇〇」とし、情報源は母語や英語で書かれたものでも良いとしている（但し、出典だけは必ず明記）。各自が母語や英語で得た情報から必要なものを取り出し、パソコンやスマホの翻訳機能を利用して日本語に変えて資料を作るが、その日本語は自分自身が読んで理解できるレベルにまで修正するよう指導している。この修正にあたって、学生と指導教員とのやりとりが行われ、資料の構成や内容を整えていく。PPT や原稿の発表資料（word）は、OneDrive に保存用のファイルを作成し、学生も教員もいつでもどこからでもアクセスでき、共有と同時作業が可能な状態にしてある。

しかし、スケジュール上最も時間がかかるのは、2 回目の「発表準備①（調査計画書作成・発表資料（PPT）の構成理解とパソコン入力練習）」である。特に同じ初級でも、教員からの日本語による指示がほとんど理解できないレベルの学生や、日本語でのパソコン入力や PPT の資料作成が初めての学生への指導には非常に時間がかかる。ある程度日本語入力のできる学生や PPT 作成の経験がある学生の助けを借りながら、なんとか先に進んではいるが、既にできている学生を待たせることになる。また、学生達の母語はバラバラであり、常にうまくいくとは限らない。そこで、もしこのステップにおいて AI ツールを活用し、学生達が個々に（自律的に）発表資料の構成理解やパソコン入力の練習などを行うことができれば、一人一人が作業時間を有効に使うことができるであろう。

更に、この科目において最も重要な 9 回目～11 回目のステップ「発表原稿の修正から発表練習（原稿読みと発音修正）」でも、担当教員一人だけでは複数の学生達に対応しきれず待ち時間を与えてしまい、教員の添削作業が授業時間外に持ち越されたり、学生達の発表練習（特に発音）が不十分となっている。従って、この段階で学生一人一人のペースに合わせた原稿の添削（添

削履歴も明示)や模範的な原稿の読み方を聞かせ、発話練習させるステップを AI ツールによってサポートしてもらうことができるなら、発表内容をより充実させ、日頃から常に不足しがちな発話練習に時間がかけられるという大きなメリットが期待できるのではないだろうか。

AI ツールの活用によって、以上のような調査発表活動科目の課題を解決できれば、これまで常に不足していた発話練習時間を増やし、到達目標を更に上げ、今後の学生数の増加にも対応できるであろうと期待する。

(ii) 漢字科目における AI 活用

加えて、第三著者が直接指導している科目ではないが、別科日本語専修課程の学生達にとって非常に大切な漢字強化の科目がある。漢字は、ひらがな、カタカナのような単なる表音文字とは異なり、そのひとつひとつに意味を持ち、語句を形成し、読解力に大きな影響を与える。

昨今では日常的に手書きで文字や文章を書く機会が減り、外国人留学生への漢字教育は読み方中心となっているが、それでも漢字ひとつひとつの意味を知り、漢字が書ける漢字圏の学生と非漢字圏の学生との差は大きい。漢字圏の学生は正しい読み方(特に訓読み)ができなくても、漢字の意味がわかるため、読解の速さに大きな差が出る。また文章を書く際にも漢字の使用率が高いため、内容のレベルが高く評価されることがある。大学に進学すれば、振り仮名のない教科書や資料を読み、レポートを書かなければならない。非漢字圏の学生達にとっては非常に高いハードルである。このような漢字圏と非漢字圏の学生達が同じクラスで漢字の授業を受ける場合、お互いに満足できない状況となることがある。漢字圏の学生達にとっては授業で扱われる漢字が易しすぎ、特に漢字の意味の説明や書き方の指導は不要で退屈である。一方、非漢字圏の学生達は、漢字の意味や書き方も丁寧に教えて貰いたいと言う。その結果、漢字強化の授業は自習時間が多くなり、上達度も把握しにくい。また、紙の教科書は持ち歩くのに重く、意味や解説部分は英語訳しかないものが多い。最近では漢字学習のアプリも複数開発され利用者も多いようではあるが、ゲーム感覚の軽いものでは、知識が深まらず、定着もしにくい。

そこで、深い研究に基づいた漢字学習教材を AI によって更に応用を利かせ、使いやすくしたアプリができれば、授業の中でも有効活用ができ、学習効果が期待できる。理想を言えば、単漢字の意味と読み方、文中での読み方、読み練習(チェック機能付き)、書き方(筆順動画)、書き練習(チェック付き)を含み、基礎漢字順、教育漢字順、日本語能力試験のレベル別、分野別などに内容を自由に組み替えることができる機能や、多言語翻訳機能があればほとんどの問題が解決できるだろうと考える。

(3) AI を活用したタスク型学習の英語教室への導入

モチベーションは、第二言語習得に影響を与える主要な要因の一つとして広く認識されている

(Dörnyei, 2001)。しかし、日本の大学の英語を外国語として学ぶ授業（EFL）では、多くの学生のモチベーションが低く、限定的な授業参加、そして英語使用時の高い不安を示している。これらの課題は、特に大規模かつ習熟度が混在するクラスにおいて顕著であり、個別的な支援を提供することが困難である点が問題となる。本稿で述べてきた近年の AI の進展は、こうした問題に対処する新たな可能性を提示している。AI は即時的なフィードバック、個別的な説明、および他者の目を気にせずに行える対話機会を提供することが可能である。これにより、クラスの規模や習熟度の水準にかかわらず、学生は個別化された支援を受けることができる。

コンピュータ支援言語学習（CALL）に関する先行研究によれば、テクノロジーを活用した学習が学習者のモチベーション、自律性、および学習参加を高める可能性を示唆している（Chapelle, 2001; Warschauer, 1996）。しかしながら、日本の大学 EFL 環境において、AI を活用したタスク基盤型学習が学生のモチベーションに与える影響についての実証研究は依然として限定的である。そのため、本研究において、ChatGPT を活用した AI 支援型タスク基盤型学習が、従来型指導と比較して学生のモチベーションを向上させるか否かを検証したい。仮説として、AI 支援型学習を用いる学生は、授業参加意欲、自信、学習の楽しさが高まり、不安が低減することにより、より高い動機づけ水準を示すと想定する。

こうした仮説を実証するため、2026 年度春学期に実施される城西大学の「English Communication I A」の 2 クラスを対象とした準実験デザインを採用することとする。約 40 名の学生が本研究に参加し、各クラス 20 名程度を想定する。A グループを実験群とし、構造化された学習支援のために ChatGPT を使用する。B グループは統制群とし、AI を使用しない従来型の指導を受ける。両群は同一の担当教員（第五著者）、学習目標、プロジェクト課題、および指導期間を共有し、唯一の差異は AI の使用有無とする。

授業課題は「Cultural Exchange Day at Josai University」と題するグループプロジェクトである。本プロジェクトでは、学生は 4～5 名のグループで、来訪する留学生のための 1 日間の文化交流プログラムを企画する。具体的には、歓迎活動、文化体験、昼食会、言語交流活動、および 1 日のスケジュールを含む英語プレゼンテーションを作成・実施する。本プロジェクトは第 5 回授業から第 9 回授業までの 5 週にわたって実施される。実験群の学生は、文法説明、語彙支援、ライティングに対するフィードバック、発音支援、会話練習のために、あらかじめ定められたガイドラインに従って ChatGPT を使用することを許可する。ただし、AI が生成した文章をそのまま転用すること、あるいは AI に課題を代行させることは禁止する。

学生のモチベーションは、リッカート尺度の 5 件法に基づく事前・事後質問紙により測定する。質問項目は、授業参加意欲、英語に対する自信、学習の楽しさ、不安の水準を評価するものである。データ分析には記述統計、対応する t 検定、および独立サンプル t 検定を用い、群内および群間のモチベーションの変化を比較する。AI 支援（実験）群の学生は、統制群と比較して、より高

いモチベーション、自信の向上、学習の楽しさの増大、不安の低減を示すことが予想される。

こうした検証は、AI 支援型学習の有効性に関する実証的知見を提供するとともに、大学英語授業における AI 活用の実践的方策を提示することにより、EFL 教育研究に貢献するものである。特に、大規模かつ習熟度が多様な学習環境において、学生のモチベーションおよび学習参加を高めるための有効な手立てを示すことが期待される。

4. 今後の研究の展望

第2章および第3章でこれまでと今後の AI 活用の実践について述べてきたが、ここでは、そうした実践データを如何に整理・分析していくかを検討したい。

(1) データ解析 (AI アプリの効果検証および分析)

語学教育に AI アプリを効率良く利用するためには、①学生側、②教員側、③職員側の学習効果・利便性を検証する必要がある。例として本学別科・日本語基礎科目を考えると効率化を図るために夫々の作業に関わる部分の AI 利用とデータ解析について考案する。

第二著者の一連の授業の主となる構成を参考にして考える。

①学生側の AI 利用を考えるとときに使用語彙・文法項目の確認及び WebClass 上での入力プロセスは AI を利用することによって学習能力のためのアシストおよび形式的作業の時短を可能とし、学習時間の増加に繋がることが期待できる。

②教員側の AI 利用を考えるとときに学生の修正に対する教員の再確認および追加指摘や説明等は学生一人一人の能力を再確認する作業であるために AI 利用は適していないと考える。その他テーマ確認、事前準備の情報収集は利用する生成 AI プログラムの性能によって異なるものの教育の主体となる教育質向上に繋がるものと考ええる。

③職員側の AI 利用を考えるととき学生による出席管理、時間割調整、専門別の進学支援に関わる情報収集等は AI の利用により作業時間と労力の改善につながることが期待できる。

2026 年度 AI アプリ導入の際に個々の利用者による上記項目に関連するデータ収集とデータ解析から語学教育の効率化を図る本学独自の AI アプリの構築も考えられる。2026 年度得られる調査データを数理モデルの分析を目的として理解志向型モデリングに利用することを考案し、以下のデータ収集を行いたい。

表6. 各利用者の AI アプリ利用効果の解析に必要なデータ集積項目

	データ集積項目		
学生	1コマ/週に対する AI 利用時間	学生一人一人の授業時間内で取得した語彙数	毎回の演習・復習の点数の変動 (成績変化)
教員	1コマ/週に対する AI 利用時間	添削時間/授業時間の変動	事前準備にかかる時間の変動
職員	1週間の AI 利用時間	データ管理に必要な時間の変動	情報収集に利用した時間の変動

表6に示した個々の利用者のデータ集積から線形モデルを立てることができれば各利用者の AI 利用による作業時間に対する成績効率や作業効率の変形を変数として分析のモデルを組み立てることが考えられる。また、利用者間の相関関係のモデルの構築も考えられる。

例えば、簡単な一例として学生の AI 利用時間と習得語彙数の関係性を一番簡単な 2 変数モデルとして考えたとき、

$Y = aX + b$ とすると X, Y が変数で a, b がパラメータと表すことができる。

ここで X を AI 利用時間、 Y を修得する語彙の数あるいは成績の変動率として X と Y の関係性が得られる。係数とするパラメータ a と傾きを示すパラメータ b から国籍による偏差やスタート時点でのプレースメントテストによる成績の違いによる Y への影響などがモデルとして考えることが出来る。

データ解析の精度を高めるためにはデータ数を多く集積することが重要である。従って、日本語以外の語学クラスにも調査対象を広げることによってより詳細なデータ解析を求めることが出来る。また、AI 利用のデータと比較するために AI アプリを利用していないクラスのデータ収集も同時に行う必要がある。

データ収集の留意点としては、利用する AI アプリの機能に関連するもので各項目において AI 利用時のデータを正確に記録するプログラムが構築されている事、利用者のデータ収集に対する理解と積極的な取り込みが大切である。

2026 年度 AI アプリ利用の導入による語学教育の効果を検証することは学生の語学能力を高める調査だけではなく教職員の作業時間及び管理業務の改善につながる項目を数値解析により明らかにし、本学独自の教育プログラムの構築につながる事が期待できる。

(2) Layer 別の質的分析 (アンケート調査/インタビュー調査)

本研究では、量的指標にもとづく効果検証(前節(1))に加え、AI 活用が「どのように受け止められ、どのような学修行動・業務行動の変容を生み、どの局面で躓きや葛藤が生じるのか」

を明らかにするため、Layer 別の質的分析を実施する。

ここでいう Layer とは、学習者個人の言語技能向上を目的とする学習支援 AI (Layer1)、授業改善・教材開発等を目的とする教育設計支援 AI (Layer2)、履修・在籍管理や留学生支援等を目的とする運営支援 AI (Layer3) からなる三層構造である。

まずアンケート調査では、各 Layer の利用経験者（学生・教員・事務職員）を対象に、①有用性（学習／業務のしやすさ、時間短縮、質の向上）、②安心感（誤情報・偏り・表現の適切性への不安、個人情報・機密情報への懸念）、③自律性（自分で考えながら使っている感覚、依存の兆候）、④運用性（ルール理解、プロンプト共有・チェック体制の有効性）を中心に、Likert 尺度項目と自由記述を組み合わせる。特に Layer1 では「フィードバックを受けた後に自己修正が起きたか」「学習の継続意欲・自己効力感がどう変化したか」を、Layer2 では「教材作成・評価補助における負担感の変化」「授業設計上の新しい気づき」を、Layer3 では「問い合わせ対応・履修支援・データ整理等における標準化／属人化解消の実感」「導入上の障壁（具体的活用像の欠如、セキュリティ不安等）」を重点的に問う。

次にインタビュー調査では、アンケート回答者のうち代表性（利用頻度、リテラシー水準、担当業務・科目、学習者属性等）を考慮して抽出した対象に半構造化面接を行い、数値化しにくい経験知を深掘りする。具体的には、(a) AI を使う場面の意思決定（なぜそこで AI を使う／使わないのか）、(b) 出力を評価・修正する過程（誤りの見抜き方、教員・職員による確認の負担、学習者の丸写し抑制策）、(c) 協働の実態（プロンプトや事例の共有、チェックの役割分担、改善サイクルが回った具体例）、(d) 学習・業務の「質」が変わったと感じる瞬間（学習者の発話増加、授業内の待ち時間の減少、問い合わせ対応の平準化等）を中心に聴取する。得られた逐語録は、Layer ごとにテーマ別コーディングを行い、共通項（促進要因）と差異（阻害要因）を整理した上で、量的データと突合するトライアングレーションにより解釈の妥当性を高める。

なお、調査にあたっては、匿名化・同意取得を徹底し、個人が特定され得る情報や機微情報を AI へ入力しない運用原則を前提に、現場の安心感と研究倫理の両立を図る。

以上の質的分析により、三層モデルに沿って「学習支援・教育設計・運営支援」が相互にどう連動し得るかを具体的事例として描出し、次年度以降の設計改善（ルール整備、研修内容、プロンプト共有の仕組み、成果物チェック体制）へ還元することを目指す。

おわりに

本稿では、教職協働による生成 AI 活用を、語学学習支援と教務関連業務支援の双方に位置づけ、研究枠組みと試験的な取り組みの概要を整理した。すなわち、学習者の対話練習・ライティング支援・語彙文法確認等を中心とする学習支援（Layer1）と、授業設計・教材作成・評価補助等を視野に入れた教育設計支援（Layer2）、さらに多言語案内文作成や問い合わせ対応の下書き、要点抽出等の定型業務における運営支援（Layer3）を、同一の実践基盤の上で連携させる可能性を提示した。そのうえで、効果検証に向けた評価観点（学習時間、反復回数、自己修正、心理的負担、品質、誤訳・誤情報等）を設定し、量的・質的なデータ収集の設計を示した点に、本稿の第一の意義がある。

ただし、本稿が扱ったのはあくまで研究1年目（2025年度）における計画整理と試行の段階であり、実践の規模・期間・対象が限定される以上、一般化可能性や因果推論には自ずと限界がある。また、生成 AI の利用は学習者・教職員のリテラシーや入力工夫に依存しやすく、成果が「AI そのもの」によるのか、「使い方の指導」や「運用ルール整備」によるのかを切り分けて論じる必要がある。加えて、個人情報・機密情報の取り扱い、誤情報の混入、学習成果物の真正性（丸写し等）といった倫理的・運用上のリスクは、教育効果と同程度に重要な検討対象である。したがって、次年度に向けては、効果の見えやすい指標のみを追うのではなく、現場の安心感と実装可能性を担保する設計を同時に磨き込むことが不可欠である。

次年度（2026年度）には、本稿で計画した AI 活用案を、実際の授業の中で体系的に実践する。具体的には、授業内外の学習行動の変化、学修成果物の質的向上、学習者の自己効力感、ならびに教職員側の作業時間・心理的負担・品質の変化を、事前事後比較やログ、アンケート、インタビュー等を組み合わせて多面的に把握する。その際、活用の「成功例」だけでなく、躓きや抵抗感、運用上の摩擦といった「うまくいかなかった経験」をも同等に記録し、改善の手がかりとして位置づけたい。

そして2026年度の実践結果を踏まえ、研究全体の成果を最終報告として文章化する予定である。最終報告では、三層（Layer1～3）の連動が教育・運営にもたらす効果と限界を、データにもとづいて記述するとともに、教職協働モデルとしての運用手順（入力ルール、チェック体制、プロンプト共有、研修設計等）を、再現可能な形で提示する。以上により、生成 AI を一過性の道具としてではなく、教育活動と大学運営を支える持続的な実践基盤として位置づけるための知見を提供することを、本研究の到達目標としたい。

参考文献一覧

- 佐藤弘毅 (2024) 「学部留学生を対象とした日本語文章表現の授業における ChatGPT の活用」『名古屋大学言語教育センター日本語教育部門年報』 第 1 号 pp.72-73
- 高木有美 (2025) 「Generative AI in English Language Education : An Annotated Bibliography」『茨城キリスト教大学紀要』 第 58 号 pp.333-347
- 寺嶋弘道・稲田栄一 (2024) 「ChatGPT によるレポートへのフィードバックとその活用に関する一考察」『日本語教育方法研究会誌』 第 30 巻 2 号 pp.138-139
- 長谷川由香 (2024) 「ChatGPT による日本語会話評価の可能性－ OPI データを活用して－」『日本語教育方法研究会誌』 31 巻 1 号 pp.106-107
- 柳瀬陽介 (2023) 「AI 時代における第 2 言語としての英語力 一大規模言語モデル AI の可能性と限界からの考察」『JACET 中部支部紀要』 第 21 号 pp.1-16
- 柳瀬陽介 (2025) 「AI 活用により英語学習者を自律的ユーザーに育てる－京都大学の学術英語ライティング授業についての省察的報告－」『京都大学国際高等教育院紀要』 第 8 号 pp.1-57
- 吉田信介 (2024) 「生成 AI による英語教育の可能性」『関西大学高等教育研究』 第 15 号 pp.129-134
- Chapelle, C. A. (2001). Computer applications in second language acquisition: Foundations for teaching, testing, and research. Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z. (2001). Motivational strategies in the language classroom. Cambridge University Press.
- Warschauer, M. (Ed.). (1996). Telecollaboration in foreign language learning: Proceedings of the Hawai'i symposium. University of Hawai'i, Second Language Teaching and Curriculum Center.